

# 転生！！奇妙な冒険

パス太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日少年は前世の記憶を思い出す。戸惑う少年に襲いかかる悲劇と絶望。

そんな時、少年は一人の老人に助けられた。

これは、生まれ変わった少年が創りだす冒険譚である!!

# 目次

転生と始まり	1
修行の日々	8
しばしの別れ	14
吉崎栄！矢と出会う	18
愛と憎しみの引力①	26
愛と憎しみの引力②	35
愛と憎しみの引力③	43

## 転生と始まり

俺は一度死んだことがある。

あのころの俺はもう死んだ!!とかではなく本当に一回死んだのだ。現在は1993年7月4日。死んだ日付は2013年6月19日。おかしな話だが俺は生き返った上にタイムスリップしたのだ。

死因はよく覚えてない、殺されたような気もするし、事故だったような気もするし、病気のような気もする。とにかくあいまいな記憶なのだ。思い出しても意味のないことだが、前の自分がおぼえていた名前は自分のものから両親兄弟友達果ては漫画のキャラクターのものまで何も思い出すことができない。そんな状態なのに俺はこの記憶が真実だと確信していた。頭でどうこうという話ではない、心で心で理解したんだ。

そこまで書いて俺はペンを置いた。

「・・・何やってんだ俺は」

体を投げ出し、床にごろつと寝転がる。困った時に紙に自分の状況を書いて分析するのがおれの昔からの習慣だ。そう、ほんとに昔、前世からの習慣。

「まさか、生き返っちゃうなんてなく」

自分の手を軽く触りながら、そう考える。生前（今も生きているからなんとなくおかしいが）にもこういう感じで生き返って何かをする小説は多く見ていた。しかし、まさか自分の身にそんなことが起きるとは思ってもみなかった。SFやファンタジーが好きだっただけに少しわくわくする。自分は幼い時から超常現象にあこがれていたのだ。そのせいでよく超能力の練習をしては親しい友達から中二病とからかわれていたが。

「（このことあいつらに言ったらどんな顔すつかない）」

名前を思い出せない親友たちの顔が脳裏に浮かんで少し切ない気持ちに襲われた。あいつらと会うことはないだろう。おそらく永遠に。そう思うとなんだか名前を思い出せないことがひどく悲しい。少しだけ俺は涙を流していた。

\*

俺が転生。というより前世を思い出したのは昨日、目が覚めた時だった。その瞬間まで俺はただの少年だった。名前は吉崎 栄よしぎき さかえ。年齢は8歳。国籍は日本。好きな教科は算数で嫌いな教科は国語。好きな食べ物はオムライスで、シイタケが嫌いなそんなどこにでもいそうな子供だった。それがどうだ、ある日目が覚めたら、あら不思議、見た目は子供、頭脳は大人状態だ。転生したのはうれしいがもうちよつと思いつく年齢とタイミングを考えてほしかった。特にタイミングだ、タイミング。とにかくタイミングが悪い。

殴り書きでそう書いた後、俺は文字を書き込んでいた手帳を閉じた。そして辺りを見回す。目の前には何やら古ぼけた市場がある。市場はとてにぎわっていて見ただけで活気をもらえるような光景だ。普通ならこの光景で気分が少しまぎれるのかもしれないが、俺はそうじゃなかった。なぜならこの市場は一目見ただけでここが日本じゃないことがわかってしまうからである。

「(なにも家族での旅行中に記憶が戻らなくなっただけでいいじゃないか!!)」

俺は心の中で叫んだ。すぐ近くで、母親がなにやら変な野菜とにらめっこしている。父親は上機嫌にウイスキーを飲んでいた。3人いる兄弟達はそれぞれが気になるものを屋台で買っていた。こんな家族でのお楽しみの時間の中で俺は前世の記憶を取り戻してしまったのだ。まったく間が悪いにもほどがある。ゆっくりこの現象について考えることもできないじゃないか。

「どうした?・栄」

兄にいきなり話しかけられて、俺は少しだけびくつとする。どうやら朝からずっと静かに自分の置かれている状況について考えていたので、兄に要らぬ心配をかけていたようだ。俺は、なんでもないと兄に答える。兄はまだ少し心配そうな顔をしながらまた店の方へ行った。

「(せっかくの旅行を俺がだめにしたくないな)」

俺はそう考えて、兄弟たちのほうに歩いていく。別に、前世の記憶が戻ったからと言って俺のこの8年間の記憶や思いが消えたわけではないのだ。愛する家族の楽しみを邪魔したくはない。

俺は旅行が終わるまでは前世の記憶について考えないことにした。せっかくの旅行なんだ楽しまなきゃ損だろう。

\*

辺りの様子はよくわからない。ただ自分が倒れていて、まだ息をしていることと、目の前に男が立っていることだけはわかった。

市場を出た後、俺は家族と一緒にいるところに行こうと、話をしながらしばらく歩いて、それからバスに乗った。それはとっても幸せな時間だった。

バスに乗って少ししたときにそれは起こった。一人の男によってバスは破壊されたのだ。それが本当にその男によっておこされたものなのかよくわからない。だが俺は見たのだ。その男の周りの空間がゆがんでいくのを確かにこの目で見たのだ。

男はさっさと歩いて行ってしまふ。俺はどうすることもできずに、意識を失った。

\*

子供のころからよく来る河原で俺たち三人は座っている。俺はふと浮かんだ質問を隣に座る にした。

「なあ、 ?お前は人生で一番大切なのはなんだと思う?」

は少し考えてから、お前はなんなんだよと聞き返してくる。

「俺か?俺はなあ。 :刺激だと思ふ!退屈こそが最もつらいことだと思ふからな!」

「……相変わらず、中二病だな。 は」

話を横で聞いていた がそう言った。

「なんだとお？じゃあ、お前はなんなんだよ？何が一番大切なんだよ！？」

「俺は、目標だな。目標に向かって努力することこそが美しい生き方だ」

「おくおく。かつこいいですねえ〜で、結局　　は何が一番大切なんだ？」

はやっぱり少し考えてから口を開いた。

「納得…かな」

「納得う??」

俺と　　の声が重なる。

「俺はどんなことでも納得してできるならそれがいいよ」

はボーとした様子でそう言った。

\*

気が付くと俺は、見知らぬ部屋で眠っていた。腕や足が痛い、どうやら骨が折れているらしい。

「(前世の記憶…か)」

前世で友達にした何気ない会話を夢に見るなんて、そんなに俺は前世に未練があるのだろうか。

「(てゆうか。なんで俺こんなところに…)」

無理やり体を起こそうとして体に激痛が走る。

「あぐっ!!」

その声を聞きつけてか隻腕の老人が部屋に入ってくる。

「おいおい！何しとるか坊主!!両足と左手。後、肋骨まで折れとるんだぞ!!動ける訳があるか!!」

老人はしつかりとした足取りで俺に近づきそうだった。どうやら俺を助けてくれたのはこの老人らしい。しかし俺も焦っているんだ、おとなしくしていることなどできない。俺は老人を見つめる。

「どうしても行かなきゃいけないんです。家族が…」

痛む体を見無視して俺はそう言った。その言葉に老人の表情が暗く

なる。

「あのバスの事故で生きとったのは、お前だけだよ」

「え？お、俺だけ？じゃ、じゃあみんなは……」

老人は静かに首を振る。それがすべてを物語っていた。

陽気な父さんも：真面目な母さんも：優しい兄さんも：おっとりした姉さんも：甘えん坊の弟まで……みんなみんな……。まただ。また俺は大事な人と会うことができなくなってしまった。誰にも別れを告げられなかった。誰にも感謝を伝えられなかった。神は俺にこの悲しみを与えるために俺に第二の人生を与えたのだろうか。

目から涙が溢れ出し俺は一時間ほど泣いた。

\*

「(なんか俺、前世の記憶が戻ってから泣いてばっかだな)」

もしかしたら、体に合わせて心の方も子供になっているのかもしれない。少しだけ冷静になった頭で俺はそう考えていた。部屋に老人が入ってくる。その手には食事が持たれていた。

「おお、坊主。落ち着いたか。どれちよつと見せてみる」

老人は俺の腕や足を触り、俺の反応や傷を確かめる。

「まーこの分なら問題はあるまい。あとは食って元気になるだけだな」

老人はその手に持った料理を俺に食べさせてくれた。それはとてもおいしくて俺はまた少し泣きそうになるのを耐える。その様子に老人は偉いぞといった。お前は強い子だと。

食事が終わると老人は食器を持って部屋を出ていく。少し寝た方がいいぞと言われたが俺はともそんな気にはなれなかった。今俺の頭の中ではさまざまな記憶や考えが渦巻いていた。家族のことや、老人のこと。前世の友達や、あの男のこと。夢の中で友が言った言葉。きつとこのままおとなしく暮らしていけば前世よりも長生き出来るだろう。だがそれでは俺は納得・出来ない。

「復讐はいいことだとは言えんぞ」



「な?」

まるで心を読んでいたかのようにいつの間にか入ってきた老人がそう言った。

「事故にしてはバスの壊れ方がおかしいと思っていたが。坊主、お前は犯人を見たんだな」

俺は唾然としながらもうなずく。先ほどまでは優しい雰囲気纏っていた老人が今ではまるで歴戦の戦士のような強い雰囲気になっていくからだ。

「坊主。お前はその犯人をどうしたい?見つけたいか?捕まえたいか?それとも…殺したいか?」

老人はおよそ8歳の子供にするようなものではない質問をした。ここで普通の少年なら恐怖やらなんやらで怖気づいてしまうかもしれない。だが幸か不幸か俺は前世で17年、現世で8年生きた男だ。今自分の中にある感情を正直に伝えることができる。

「俺は仇を取りたい!!家族の仇を取りたい!!」

叫んだことにより体中が痛んだが気にしない。

「そうか」

老人はそう言うと、俺の方に近づき、そして、俺の腹を殴った!!

「がっ!!!」

体に稲妻のように痛みが走る。肺から空気が抜けていくのがわかった。数秒間俺の息が止まり、そしてそこからさらに数秒たった、そして変化に気づく。

体が妙に熱い。

「痛みが…:…ない?」

俺は体を起き上がらせる。さっきまでの痛みが嘘のようになくなっていく。

俺は老人の方を見る。老人はにかつと笑った。

「坊主。名前は?」

「…:…吉崎 栄」

「そうか栄。わしの名前はメッシーナ。お前にこの『波紋』の技術を教えてやろう!!」

これがおれの物語の始まりだ。俺が名前を思い出すことのない世界での戦いの日々が始まりの日だ。

## 修行の日々

師匠と出会ってから3か月が過ぎたが本格的な波紋の修業はまだ始まっていない。だが俺はこの3か月で様々な情報を手に入れた。

まず1つめは、ここが前世で俺が読んでいた物語の世界であるということ。なんて題名の物語かは忘れたし、何て名前のキャラクターが出てくるのかも覚えていないが、これはとても重要な情報だ。俺は名前を思い出すことはできないが、その物語の大体のストーリーや、キャラの容姿や能力、あとなぜか物語の舞台と名前を思い出すことができるのだ。これだけの前情報はこの世界の俺の行動に影響してくるだろうし、俺も利用するつもりだ。

2つめは、バスを襲った男のことだ。俺はバスが襲われた時の記憶を何回も思い出し何か男の特徴をつかもうとした。そして俺は、1つその男の特徴を思い出したのだ。男の手は逆だった。男の本来右手であるはずの手は左手で、左手であるはずの手が右手だったのだ。この情報だけで男を見つけ出すのは少しづらいものがあるだろうが、それでもかなり見つけやすくなった。両掌が反対の人間なんてそういういないのだから。

最後に3つめ、これは手に入れた情報というよりも起こったことだが、家族が殺されて、親戚もいなかった俺は、師匠に引き取られて今はヴェネチアの城の様な所に住んでいる。師匠は俺が復讐だけで生きるのを良しとせず、この3か月は勉強と基礎的な波紋の呼吸を少しだけやっていただけだ。助けてもらった上にこんなに良くしてもらえるなんて感謝してもしきれないが、俺は早く力を手に入れなければならないんだ。

俺は手帳を閉じて、一息ついた。

師匠は今、街に買い物に行っている。俺はその間ずっと波紋の呼吸をしていた。やはり、そうそうなれるものではない、物語の主人公たちはこれを2週間や生まれつきで出来るようになっていたのだからその才能が感じられる。師匠曰く俺にも多少なりの才能はあるらしいが、こんな前例を知ってしまったので、微妙な気持ちだ。

ごとつと何かが床に落ちる音が聞こえた。俺は気になってその音の発生源を探す。そして見つけた。

「このマスクは確か…」

そこには、あの物語の主人公の一人が使っていたマスクだった。このマスクは波紋の呼吸を強制するもので修行に使われていたはずだ。ごくりと俺は唾をのんだ。

この後、窒息寸前になった俺が師匠に助けられたことはまた別の話だ。

\*

あのバスの事故からすでに2年が経過していた。俺はいつものように、波紋の修業にいそしんでいる。

「よし栄、次はこれをやってみろ」

「じいさん。なんだこの紙は？何をすればいいんだ？」

俺とメツシーナの関係は当然のごとく深まり、もはや家族同然に暮らしていた。いつからか俺は彼を師匠ではなくじいさんと呼ぶようになっていた。そんなじいさんが俺に渡したのはインクか何かで真っ黒に染まった紙だ。

「まあ、見とれ」

じいさんは黒く染まった紙に手をべったりと付ける。そして、力強く呼吸した。じいさんが手を離すと真っ黒だったはずの紙に白い丸ができていた。

「すげえ！じいさん！どうやったんだ!？」

「ふふん。これはな、波紋でインクをはじいたんだ」

「でもきれいな丸だぜ？」

「いつもいっとるだろうが！一点集中!!その応用で丸を書くんだ!!」

そういわれて俺はとりあえず紙に手を置いた。波紋をコントロールして丸を作ろうとする。しかし出来ない。歪な変な形になってしまった。紙にインクをつけて再チャレンジする。失敗。再チャレンジ。失敗。再チャレンジ。失敗。これをしばらくくりかえした。

「なあ、栄」

「なに？じいさん」

「栄には今はわしが勉強を教えているが、来年には学校に通わんか？栄の学力なら編入は問題あるまいし、まあ、あくまで栄次第だがな」

じいさんの言葉を聞きながらも俺は修行の手を休めない。再チャレンジ。失敗。学校か、俺は前世では17まで生きている。それに加えてじいさんからヴェネチアで生活するために、イタリア語となぜか英語（じいさんはなぜか日本語が堪能だったため、わかりやすかった）を教わり、それらを習得していた。そのため、現在の10歳の体にしては不釣り合いに頭がよかった。なのであまり学校に関しては、必要性を感じなかったのだ。なぜ今更じいさんがおれを学校に行かせたがるのかはなんとなく予想がついた。

「学校に通えば、修行の時間は減るが今よりいい勉強もできるし、それに…ほら！友達とかもなあでできると思うんだよ」

友達。そう友達だ。現在、俺には友達と呼べる友達がいない。街に顔見知りは何人かいるが友達と呼べる人間はいなかった。俺は特に気にしていないが、じいさんはそれが心配らしい。再チャレンジ。失敗。

「そうだね。俺学校に行くよ」

「おお!!そうかそうか!!それはいいことだ!!」

じいさんは心底安心したような声でそう言った。

たった一人しかない家族なんだ。心配はかけたくない。

\*

俺が学校に通い始めてから2年がたった。現在俺は13歳だ。通っている学校ではじいさん思惑どおりに友達を作ることができた。修行がしたいから部活動などはできないがそれでも充実した生活だ。

「なあ、サカエ？お前の家はなんであんなにでかいんだ？」

隣を歩くヴィクターにそう聞かれて、俺はじいさんがすごいんだよと答える。

「あくあく。もうこの学校で過ごす最後の夏休みだなく」

「そうだな」

「サカエは進路とかもう決めてんの？」

「ああ大体はな」

ヴィクターはマジかよ!!俺も決めなきやなーと言っている。

「で!この夏休みはサカエはどう過ごすんだ？」

「家で過ごすかな」

「サカエは毎年そうだな。もしかして進路はひきこもりか？」

なわけねーだろと俺たちは笑いあう。その後は2人で、同じ学校に入学してきたの日本人のことや、これからのことを話しながら帰った。

\*

「はあ．．はあ．．」

俺の息は上がっていた。夏休み2日目。俺はじいさんに頼んである試練に挑んでいる。その名も『ヘルクライム・ピラー地獄昇柱』。かつて多くの波紋の戦士が挑み、そして死んでいった地獄の試練である。俺はその試練にすでに24時間以上も挑み続けていた。

「ぐっ!!」

一瞬波紋の力が弱まりわずかに体が下がる。

「(想像以上にきつい…だが!!)」

俺はすでに17m地点まで登ってきていた。残りはあと7m。オーバーハングがきついところだがこのままいけばきつとクリアできらるだろう。俺は再び手を動かし始めたのだった。

さらに24時間が経過したところで、現在約20m地点。あの物語ではここら辺で、主人公がトラップを発動させてしまうのだが、俺はそんなにあほではない。奴とは違うのだよ奴とは。

「(あれ?これフラグじゃね?)」

そう思った瞬間、それは起きた。柱が老朽化していたのかくっついていたところが少しだけ崩れたのだ。本来、慌てるほどのことではな

いのだが何分俺はかなり疲れていた。そのため一瞬とは言え波紋が解けてしまったのだ。

「うわっ!!?」

俺はとっさに柱に手を伸ばし触ってしまった。そしてあろうことか触ってしまったのだ、あのヒビに。

「あ」

ガコンと手に感触がくる。瞬間！油が噴出された!!

「(……マジかよ……)」

目の前に広がる油のバリアーに俺は呆然とする。果たして俺はあのキヤラのように2つの波紋を同時にコントロールすることができののだろうか。そして出来たとしてもその後この柱を上る体力が残っているのだろうか。そんな考えがおれの頭によぎる。

「(やるしか……ないか)」

目の前にある油のバリアーに対する恐怖はもちろんあった。だがそれ以上に、俺の中では強くならなければいけないという思いの方が強い。両親や兄弟達の仇を取るために俺は強くならなければいけないのだ。俺は俺自身を納得させたい。

俺は足にくつつく波紋を集中させる。そして、油のバリアーに手を突っ込んだ。

「(よしいける!!)」

はじく波紋がしつかりと油を遮っている。体には傷一つついていない。俺はゆっくりと体を油のバリアーに通す。そして、柱に手が届くというその時だった。

「なっ!!」

はじく波紋に集中するあまり、足のくつつく波紋がおろそかになっってしまったのだ。

油のバリアーに押されて、俺の体が柱から離れていく。このまま壁に叩きつけられれば死んでしまうだろう。

この時、死にたくないという生物の本能がおれに一つのアイディアを与えた。

俺は素早く体すべてを油のバリアーの上に出した。そしてそのま

ま油のバリアーにむかつてはじく波紋を全力で放ったのだ!!

「うおおおおおおおおおおおおお!!」

命がけの波紋は通常の何倍もの力で俺を飛ばしてくれた。雄たけびを上げながら俺の体は柱のてっぺんに向かって変な体勢で飛んでいく。その姿はまるで膝だけでもものすごい跳躍をしたキャラと同じで、奇妙なものだろう。

「とどけえええええええええええ!!」

その跳躍で届かなければ、もはや俺に柱を上る体力はない。これで俺の生き死にが決まるのだ。

俺は運良く柱のてっぺんにたどり着くことに成功する。俺は心の中でガッツポーズをした。

しかしそこから予想外の事態が起きる。うまくてっぺんに着く所までは良かったのだが、体力切れで力を失った俺の体は勢いを殺せずそのままゴロゴロと転がってしまった。床のないところまで。

「うわああああああああああ!!」

俺は本気で2度目の死を覚悟する。しかし、それは幸運にも回避された。

「まったく、なんちゅーのぼり方だ」

「サ、サンキューじいさん。助かったよ」

てっぺんから落ちた俺をじいさんが足をつかんで引つ張り上げてくれたのだ。その顔はにかつと笑顔だった。俺もその笑顔に答えるように笑顔を返す。

「おかえり。栄」

「たたいま。じいさん」

栄、ヘルクタイム・ヒラー地獄昇柱登頂成功!!52時間!!



## しばしの別れ

突然だがここでイタリアの教育制度について説明させてもらいたい。まずイタリアにも、もちろん日本と同じで義務教育がある。そして、これもまた日本と同じく小学校、中学校に分かれているのだが、日本との大きな違いが2つある。

まず1つめは、中学にも留年の制度があること。

もう1つは、義務教育が8年制であることだ（1998年当時）。

義務教育が終了している時点で俺は、どの国の高校にも入学することができない。だが俺はそれをしなかった。俺は中学を卒業してから1年を、じいさんと波紋の修業を行い、その技術を高めるのに使った。最初じいさんは俺が高校に行かない気かと思つて、苦い顔をしていたが、俺の考えを聞いて、すぐに納得してくれたようだ。

俺が中学校卒業と同時に高校に入らなかつたのは別に高校に行く気がないという訳ではない。ただ俺は、同じ年に先輩と呼ばれたくなかつただけだ（波紋の修業がしなかつたという考えも、もちろんあつたが）。

そして、1999年3月24日現在。俺が入学する高校は既に決まっていた。ぶどうヶ丘高校。そう、あの物語の1つの舞台である杜王町にある高校である。

\*

「今日も平和だな」

俺はしばらく見ることにしないであろう街の景色を見ながらそうつぶやく。少しじじ臭いなど思ったが、精神的には32年も生きているんだから仕方のないことだろうと、テキストに理由をつける。

「（この街にもだいたい慣れたもんだな）」

そんなことを考えながら、俺は街をぶらぶらする。思えば、あのバスでの出来事から約7年をこの街で過ごしてきたんだ。そう考えると、ここを去っていくのは寂しい。今では街で店を出している人のか

なりと顔見知りだし、親しい友人も大勢いる。そして何よりも、じいさんがここにはいるのだ。俺を助け、波紋を教え、そして家族として扱ってくれたじいさん。それらのすべてに別れを告げ、日本へと行くということに躊躇がないと言えば嘘になるだろう。さらに行くのは、物語の主人公たちが今年、戦いを繰り広げる舞台となる杜王町だ。最悪の場合俺は死んでしまうかもしれないだろう。しかし、俺は行かなくてはいらない。杜王町に行けば、あの男の手掛かりがつかめるかもしれないからだ。今年あの町には、念写の能力を持つ人間がやってくる。その能力を使えば、もしかしたら俺は思っているのだ。そしてそれだけではなく、あの街に行けば、波紋以外の能力を手に入れることができるかもしれないのだ。…命の危険を冒すことになってしまふが。

「よ！サカエ！まだこっちにいたのか!!」

「うわ!!」

いきなり後ろから話しかけられ俺は素っ頓狂な声を上げる。そこにはなんだよ、そんなにびっくりしなくてもいいじゃないかとおつばやきながら立つヴィクターの姿があった。

「いきなり大声で話しかけられたら誰だつてびっくりするわ!!」

「すまんすまん」

ヴィクターは特に悪びれる様子も見せずと言う。

「で、サカエ！あっちにはいつ行くんだ？」

「……明日だよ」

そんな様子のヴィクターに少し怒りながら俺は答える。するとヴィクターは、そうかそうか、それはラッキーだったと言いながらポケットを探り出す。

「ほれ！これやるよ！持ってけ！」

「ヴィクターなんだこれ？」

「何ってお守りだよ！お・ま・も・り!! ジャパンではこういうの渡すんだろ？」

「…まあそうだな。ありがとよ」

俺はヴィクターにもらったお守りをポケットに入れようとするが、

いまいちデカくて入りそうにない。ヴィクターはどうやってポケットに入れていたんだろうか。そんな俺を見ながらヴィクターは去っていく。「じゃーな現在無職！俺はこれから帰って課題だ!!」という捨て台詞を残して。俺はそんな友達の見ながら帰路に着いたのだった。

\*

俺は荷物の最終確認をしている。大体の物はあちらで買いそろえるつもりだが、とりあえず必要最低限の物は持っていく必要があるだろう。

「着替え良し。歯ブラシ良し。財布良し。チケット良し。鍵良し。これくらいかなあ?」

教科書とかそこら辺の物は、じいさんが用意してくれた家の方に送ってもらっている。2つ返事で家を用意してくれたじいさんを改めてすごいと感じた。

「ほれ栄。忘れ物だぞ」

じいさんはその手に俺のパスポートを持っていた。

「あ。サンキューじいさん」

危ない危ない。パスポートを忘れちゃ飛行機には乗れない。じいさんに感謝だ。

「なあ栄」

「なに?・じいさん?」

じいさんの顔を見るとなんだかいつもより強張っているような気がした。

「日本はお前さんの祖国だが、ここはお前さんの家だ。何かあったらうちに帰ってきていいんだぞ」

「うんわかってるよ。じいさん」

俺は荷物を持つそして、目の前に立つじいさんを改めて見た。じいさんは少し真面目な雰囲気だ立っている。

「どうしたの?・じいさん?」

「…栄。ちよいと手を出してみろ」

「ん？ん？ん？」

俺はじいさんに向かって右手を出す。じいさんはその手を自らの右手で握手するように握った。相変わらず暖かい手だ。じいさんはしばらくそうしていた後、手を離し、俺を見た。

「…栄。今からわしが言うことを、ほんの少しでいい。お前さんの心にとどめておいてはくれんか？」

「う、うん」

俺は背筋を伸ばす。じいさんの雰囲気はいつか感じた時と同じ戦士の雰囲気になっていた。

「仇を討ち、自らを縛る鎖の戒めからその身が解き放たれた時。己の意思を突き通すために、深い深い眠りにつく事となるだろう」

「っ!!？」

これは知っている。あの物語でも行われていた死の予言だ。その予言によるとあの男を殺せば俺も死んでしまうらしい。じいさんは優しく、そして、強い顔で俺を見ている。

「いいか栄。無茶はするんじゃないぞ」

「…わかったじいさん」

「お前はわしの家族なんだからな」  
「うん」

俺は少しだけ曖昧に答える。一度死んだ命だ…仇を取れば死んでしまうかわかっているけど、俺はそれをやめないだろう。

「よし!!いっていい!!」

じいさんにそう言われて俺は歩き出した。じいさんは笑顔で俺を送り出してくれた。

これはただのしばしの別れなんだ。絶対にここに帰ってくる。それがわずかな間の慰めだったとしても。そう誓って俺は歩き出す。身体的ではなく、精神的にも、俺は歩き出したんだ。

## 吉崎栄！矢と出会う

「ふう。ま、一通りは終わったな」

俺は、片付いた部屋を見渡しながらつぶやく。杜王町にやってきてから6日。飛行機での長旅や、日本とイタリアとの時差などでなんとなくだった俺は、当初早めにやっておこうと思っていた生活必需品を買うことや、部屋の片づけなどの準備をかなりの期間サボっていたのだ。

その結果待っていたのは、過ぎ去ってしまった時間に対する後悔と、夏休み最終日に、必死で宿題を終わらせる学生のような焦りだ。そんな気持ちで昨日やつと行動を起こした俺は、たった今、ついにそれらの準備を終わらせたのだった。

「(ご近所さんへのあいさつも終わった。ノートも買った。これでこっちの方の準備は終わったなあ)」

よし、行こう。俺は、そう心の中で言ってから、立ち上がる。

\*

「かあ〜ッ！やっぱし、見知らぬ土地は、いまいち場所が理解できない！」

俺は、今、ここ杜王町を地図を片手にさまよっていた。

ここに来る前から俺は、杜王町にある物や建物の場所をしつかりと把握しておくことに決めていた。それは別に、早くここに慣れたいとかそんな理由ではない。ここ杜王町はこれから能力者が大量に生まれ、そして戦いを起こす場所だ。さらに、俺はその戦いに参加するつもりでいる。その上で、土地勘がないというのは、かなり痛いところだろう。もしも、どこどこに行ってくれと誰かに頼まれて、1人で行ったのはいいが迷子になりましたなんて、戦いの中では笑い事では済まされない。そんなことが起きないために、俺はこうしていろいろ歩き回っているのである。しかし、

「だめだ！なーんもみつかんない！」

あまりうまくいっていなかった。

俺は当初、この杜王町での戦いの主人公となる男が、その年上の甥と初めて出会った、亀のいる池と、超能力者の兄弟が異形となった父と住んでいる、不気味な家を最低でも探し当てようとして行動していた。しかし、漫画で見る街の景色と実際に自分の目で見る町の景色は当然違う上に、俺は、どんな名前の場所にそれらがあるのか全く知らないのだ。よって、そう簡単にお目当てのものを見つけられるはずもなく。ぶっちゃけ俺は、今日の搜索を断念することすら考えていた。

俺は、近くにあつたベンチに腰掛ける。あと、少し探して何も見つからなかったら、今日は帰ろうと決め、辺りを見渡した。特に変わったものは見つからない。せいぜいハトがたくさんいるくらいだ。しかし、一つだけさつきとは違う点に気が付いた。

俺のそばに、男が立っていたのだ。

男は学生服を着ており、なんとなく怪しい雰囲気を持っている。

「(なんだこいつ?)」

最初に思ったことはそれだった。そして次に、いつからいたんだ? と思った。

男の手には、弓と矢が握られている。男は、無言のまま、あろうことか、俺に向かって弓を、引き始めたのだった。

俺は体中から一気に血の気が引いていくのを感じる。その場から急いで逃げようとしたが、すでに手遅れだった。

男が弓を放つ。そして、

「がッ!!!」

放たれた弓は俺の胸を貫通する。力を失った俺の体は足から崩れ落ち、地面に横たわった。

\*

「失敗...か」

男は胸から血を流して、ぴくぴくと痙攣をしている。なんとなく他の奴とは違うような気がしていたのだが、とんだ期待外れだったよう

だ。

俺はゆつくりと、男に近づく。矢を抜いて回収してさっさとここから立ち去ろう。

俺は矢を握り、勢いよくそれを引き抜いた。

\*

くそッ！めっちゃくちやびつくりしたじゃねえかコノヤロ〜ッ!!いきなり無言で弓打つてくるとか、正気の沙汰とは思えんぞッ!!

けどまあ、何かと手間が省けた。俺の予定では主人公と一緒にこの男の家に乗り込んで、矢に刺さるつもりだったのだが。正直、成功確率が低くて困っていたのだ。第一、俺が主人公と仲良くなれる保証がない上に、矢で刺される確証もない。だからこの襲撃に関しては、サプライズでプレゼントを買ってもらった子供のように喜んでいい。でもよ、こんなことされたんだ。一発殴ったって、だれも文句はいわないよな？

\*

俺が矢を引き抜いた瞬間だった。ただびくびくと痙攣しているだけだった男の体に、力がこもったような気がした。そして、

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

死んだと思っていた男の体が跳ね上がり、そのまま雄たけびをあげて、俺に殴り掛かってきたのだ。

「なにイイイ!?!」

俺はその拳を何とか躲す。その勢いのまま、俺は数m後ろに跳んだ。俺は男と向き合う。

「…お前、生きていたのか」

俺は改めて目の前に立つ男を観察する。

男は、服の上からでもわかる程に鍛え抜かれた体をしていた。あの強靱な腕はあらゆるものをいとも簡単に破壊することができるだろ

う。普通の人間なら、あの体にビビるだろうが、俺はそうではない。俺には、相手がどんなに強い肉体を持っていようが関係ない能力があるのだから。しかし、俺の頭の中では、奴が警戒すべき人間であることを伝える警報が鳴りっぱなしだった。理由は簡単だ。目の前の男が持つ、ただものじゃない雰囲気と、胸を貫かれた直後だというのに息一つ乱さない精神力。そして、そんな男が生み出すであろう幽波紋<sup>スタンド</sup>。いったいどれほどのものになるのか、全く予想がつかない。しかし、これはチャンスだ。

目の前にいるこの男こそが、俺がずっと探し求めていた人間かもしれない。

そう考える俺は自分の口角が自然と上がっていくのを感じた。

\*

目の前の男はむかつく笑みを浮かべながら俺を見ている。その笑みにイラつきながらも、考えを巡らせる。

「(よけられるとは想定外だった。意外といい勘してんじゃんか、ちくしよう。……正直な話。今、ここで、こいつと戦うメリツトはないんだよな。つかつとなつて殴りかかったただけだし……あーあ、こんなことなら死んだふりしときゃよかった。こうなつたらやつぱりアレをやるしかないかな)」

俺は、目の前の男に背中を向ける。そして、全速力で走りだした。

「なツ!!?お前!!待ちやがれ!!」

俺は、一目散にその場から逃げだす。後ろから、男の怒りのこもった声が聞こえてくる。きつと、さつきまでの笑みは消えうせていることだろう。ざまーみるだ。男の声は、どんどん遠くなつていく。当たり前だが、波紋の修業を積んだ俺の足は、同年代の人間どころか、アスリートと比べても恐ろしく速い。さらに、100kmもの距離を走つても息一つ乱れることはないのだ。そうやすやすと追いつかれるはずがない。あくまでも人間にはの話だが。

すぐそばで、何かが空気を裂く音が聞こえる。俺には、それが何な



のかすぐに分かった。俺は速度を緩めずに、音が聞こえる方向に目線をやる。そこには、一機の小さな、まるでラジコンのような、ヘリコプターがいた。そして、ヘリコプターは容赦なく俺に向かってミサイルを発射してくる。男にしたら奇襲のつもりだったのだろう。しかし、この状況を想定していた俺の頭は、冷静に動いた。

「(この距離じゃあ、ミサイルを避けるのは…不可能。なら!!)」

俺は、まるで、野球のボールをキャッチするかのようになり、ミサイルをその手で包み込む。そして、

「(当たる面積を最小にして、波紋でガード!!)」

ミサイルが、俺の手の中で爆発する。手に痛みが走るが、我慢できないほどではない。俺は、そのままこの能力の射程外まで、走って逃げるつもりだった。しかし、その作戦が成功することはなかった。突如、俺は足に鋭い痛みを感じる。その痛みがあまりに予想外だったので俺は、足がもつれて転んでしまう。どうやらヘリコプターの中に何体か人型のがいたらしい。そして、男が追いついてきた。

「バット・カンパニーの爆弾を、手でつかむとは…それが、お前のスタンドか?」

男は、興味深そうに俺を見ながらそう言った。

「(スタンドか。やつと能力の名前を知ることができたな。…て、そんな事どうでもいいか。それより今はこの状況をどうやって脱け出すかだ)」

男のそばには、すでにバット・カンパニーと呼ばれた兵隊と兵器が大量に展開されていた。さすがに、この状況で、また走り去ろうとすれば、ハチの巣にされかねないだろう。

「(どうにかして、隙を作らないと)」

俺は、目の前の男を倒すことではなく、男から逃げる方法を考えていた。それは、勝ち目がないからではなく、下手この男を倒してしまうと俺の知っている物語と起こる事柄を変えてしまうと思っただけからだ。そうなれば、この杜王町に来た意味がなくなってしまう。それだけは何としてでも避けなくてはならない。

「ほら、出してみろよ。お前のスタンドを」

男は、せかすように俺にそう言ってくる。俺は少し考え、そして、男の言うとおりにしてやることにした。俺のスタンドが強力なものならば、それを使って逃げようと思ったからだ。しかし、そんな期待は、数秒後には消えてなくなることになった。

俺は、スタンドが出るように強く念じる。しかし、それらしきものは、一向に出なかった。何度念じても、なんどこの状況を切り抜けたかと思っても、うんともすんともいわない。俺の心に、焦りが生まれる。スタンドが使えない理由を必死で考えたが、全く浮かばない。そもそも、スタンドが使えない理由になる条件すらまともには知らないのだから、考えたところで答えが出るはずもないのだ。額に汗が流れる。「(どういうことなんだっ!!)スタンドが使えないなんて、このままじゃあ杜王町での戦いはおろか、今、この戦いを生き抜くことさえできるかどうか……いや、まだ可能性はある。俺の目にはしつかりと奴のバット・カンパニーが見えている。ということは、何かの拍子にスタンドが使えるようになるかもしれない。今は、それにかけるしかない!!)」

そこからしばしの沈黙が続いた。俺と、男の視線がぶつかり合う。その沈黙の中で、先にしびれを切らしたのは男の方だった。

「…スタンドが出せないのかあ？ だったら手伝ってやろう!!」

男は、俺に向かってスタンドで攻撃してくる。だがこれでいい。俺はピンチを待っていたのだから。

俺はバット・カンパニーの銃弾をあえて波紋でガードせず腕で受ける。腕に燃えるような痛みが走った。

「ううッ!!」

一瞬、俺の体の内側から感じたことのないような感覚がする。だがそれ以上のことはなかった。未だに俺のスタンドは姿を見せない。

「まだかあ〜?」

男の声には、怒りが含まれている。俺のスタンドが、見られないことがそんなに悔しいのだろうか。まあ、こいつの事情を考えれば仕方ないことかもしれないが、そのイライラを俺にぶつけるのは、やめてもらいたい。

そんなことを考えている間も、バット・カンパニーの攻撃は少ないながらも続けられている。銃弾が発射されるたびに、俺の体のどこかしら出血していく。さすがに、このまま攻撃を受け続けるのは少しまずいだろう。

「奴が攻撃をやめて見逃してくれるのに期待したいところだが：まあおそらく無理だろうな。：仕方ない、スタンドのことはいったんあきらめて逃げるか」

幸運なことに奴は今、俺が攻撃できないと思っている。そんな奴に隙を作らせることなんぞ、修行でじいさんに一発攻撃を入れるために油断させようとしていたときに比べたら（結局隙らしい隙など作らせられなかったが）あまりにも簡単だ。

俺は、一度深く呼吸をする。油断しきった目の前の男がそれに気づく様子はない。

俺はすぐに立ち上がれるように準備をしながら、地面に向かって意識を集中させた。

「波紋疾走!!」

地面を波紋が伝わっていく。この波紋が男に当たったところで、できることはせいぜい男の動きを数秒止める程度だろう。しかし、それで十分なのだ。あくまでこの波紋はスタートダッシュなのだから。

「なに!!くっ!!」

男に波紋が当たり、その動きは硬直した。それと同時に波紋によって俺の体は、男と反対方向にはじかれる。攻撃⇨逃走につながっている、我ながらナイスな作戦だ。

俺は再び全力で走り出した。波紋を食らっている男はおそらくスタンドで追撃することはできないだろう。もったも、だからと言って速度を緩めることなどは絶対にしない。戦いにおいて油断は命取りとなるからだ。

後ろに警戒しつつ俺は、足を動かし続けるのであった。

\*

栄。この後、念には念を入れて二時間ほど走った後に帰宅。家に帰った後、ずっとスタンドを出そうと頑張っていたが、結局なにも出なかった。

## 愛と憎しみの引力①

ベッドでうなだれながら、俺は特に見てもいなかったテレビの方に視線を送る。テレビの中では、朝のニュースが報道されていた。特に面白味もない普通のニュースだ。アナウンサーは、にこやかに新学期について語っている。しかし、俺の気を紛らわせるような内容ではなかった。チャネルを変えていく。朝のドラマ、教育番組、天気予報、どのチャネルもこれと言って興味を引かれる番組はやっていない。俺は再びテレビから視線をはずす。

そして、俺は枕元に置いてあった手帳を取り、『4月7日限界』と書きなぐった。

\*

「やっぱり、しつかりと食べないと元気が出ない！」

俺は新鮮そうなニンジンを手に取りながら、そう言った。周りを歩いていたおっさんが、いきなり大声を出した俺のことをじろじろと見てくるが、テンションの上がった俺は特に気にしない。

にんじんを買い物袋に戻し、かなりハイな気分で、道を歩いていく。矢と出会ってから、今日まで俺はずっと家にこもりっぱなしだった。理由は、矢を持っているあの男に出会わない為である。もしあの男と再会してしまえば、当然のごとく戦闘になり、そして今度はどちらか一方が戦えなくなるまで戦闘は続くだろう。俺が勝ったとしても、負けたとしても物語が変わり、目的が果たせなくなってしまいう可能性が出てくる。それは何としても避けたかった。

だがしかし、家に引きこもった俺に厳しい試練が待ち構えていたのだ。

その試練とは食糧難。なんと、我が家には、500m1のコーラが一本しか食料がなかったのである。

波紋のおかげで、普通の人よりも空腹を我慢できるとはいつても、俺は男と戦って疲れていたし、何よりも俺の体は成長期なのだ（精神

的に生きてきた年数はもうすでにおつきんと言つても差し支えないが)。そんな食べ盛りな俺の体が厳しい断食に耐えられるはずもなく、学校開始まであと2日と迫つた今日、ついに、外に出てきてしまった。後悔はしていない……少ししか。

スタンド使いはお互いがお互いを引き付ける性質を持つ。ゆえに外を歩いたらスタンド使いと出会つてしまう可能性があるのだ。よつてこの外出はかなり危険だろう。

「すみませーん！」

いきなり後ろから声が聞こえ、若干不安になつてきていた俺は聞き覚えのない声に驚き、少し体がびくつとなつた。

「足元よろしいですか？」

俺は自分の足元に視線を落とす。そこには一枚の紙が落ちていた。どうやら危うく踏んでしまうところだったらしい。俺は足元の紙を拾い上げ、紙を持ったまま声をかけてきたやつを見る。

俺に声をかけてきたのは、金髪の外国人っぽい顔つきをした男だった。

身長は大体180かそこらで、年齢はおそらく俺と一緒に少し上ぐらい、整つた顔立ちをした、まさに好青年といった感じだ。男は俺が拾つた紙と同じものをいくつも持っている。きっと、チラシ配りか何かをしているんだろう。

「あ、よかつたら一枚どうですか？」

やはりチラシ配りをしていたようで男はそう言った。

「じゃあ、もらいます」

もらえるものはもらつておこうと思ひ、俺はそういつてから、その紙に意識を向けた。

内容はどうやらスーパーの特売情報とか、怪しい宗教団体への勧誘とかではなく、人探しのようだ。

紙には情報求む!!とでかかど書かれており、探し人の大雑把な情報と、とても丁寧な似顔絵が描かれていた。思いつきり手書きであったため、目の前の外国人風の男が描いたのであるかと思つたが、きれいな字の日本語で書かれているので違うのかも知れない。そんな

ことを考えながら、俺は内容を読んでいく。

俺の思考が一瞬凍りついた。

俺は紙をたたんで買い物袋に入れると、その場から離れていく。とにかく今は、ここにいるのはまずい。

家路とは違う曲り道を曲がり、俺は歩くスピードを速めるのであった。

\*

「くそッ!! 覚悟はしていたが早すぎるだろう!!」

誰もいない公園でベンチに座りながら俺は焦りという立ちを感じてそう言った。

男が配っていた紙にはこう書かれていた。

情報求む!! 名前 デイオ・ブランドー。特徴 身長195cm程 金髪で首の付け根に星形のあざがある。

名前から判断はできないが、特徴と似顔絵からはつきりとわかった。男が探しているのは、物語の登場人物、それも最重要人物の一人と言っている男だ。そんな男が、チラシ配りなんかで搜索されている。これは、俺が最も恐れていたことの一つが現実となってしまったことを物語る、確固とした証拠だった。

紙に書かれている男——デイオ——に因縁の持つ人間が数多く集まるこの町であるものを配れば、誰かしら接触してくる可能性はほぼ100%だ。例えば、だれも接触してこなくても、俺の知る物語での話題に上がらないことはありえない。むしろ、デイオを直接殺した男なんかは最優先でチラシについて調べるだろう。

よってこのチラシは、俺の知っている物語には存在していなかったもの。つまり、イレギュラーである。そう俺は結論付けた。

はつきり言って、この状況はまずい。まずすぎる。

このイレギュラーが、1カ月、2か月後に起こってくれば俺もうまく対応することができていただろう。しかし、時期が早すぎた。何の対策もとれていない上に、このタイミングでのイレギュラーは、物語の歴史を、大きく変えかねない。最高に最悪のタイミングであるといえよう。

何としてでもチラシを配るのをやめさせなければならぬ。どんな手段を使っても、俺の目的のために、たとえ人を……………

「ヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

俺が決意を固めようとした寸前。耳をつんざく奇声が発せられる。それを聞いた瞬間、俺はベンチから離れる。

ブオンという風を切る音と共に青い物質が俺の体をかすめるが、何とか逃げ切った。

またベンチで襲われるとは……………前世で小学生の時バス停のベンチに落書きしたのが悪かったのか？

そんなことを考える俺の目に明らかに普通ではない物質が映る。

人型だがあまりに青すぎる体、まるでバッタの様な顔と体にくっついている大小合わせて10個ほどの円盤。間違いなくこれはスタンドだ。そしてそのスタンドは、今度は先ほどの奇声ではなく、ちゃんと意味を持った言葉を発した。

「躲した？まさかテメエ見えてやがるのか？俺の『ヘイト・オン・ミー』が!!」

ヘイト・オン・ミーと名乗ったスタンドは俺の方を見ながらそう言った。いかにも悪党つて感じの声だ。しかし、悪党っぽい声という印象以上に俺は気持ち悪いという印象を強く受けた。考えてみてほしい、人の頭と同等の大きさの青いバッタっぽい顔の口のところ言葉に合わせて開閉しているのだ。そこまで虫が好きではない俺にとってこれはきつい。

「その表情……………どうやらマジで見えてるみたいだな!!!」

「だったらどうだっていうんだよ、この偽ライダーが!!!」

ヘイト・オン・ミーもとい偽ライダーは何か楽しそうに叫んでいるが、俺はその気持ち悪さに叫んだ。ていうか、もうマジでしゃべらな



いでほしい、見ているだけで吐き気がしてくる。

「いやあ、ただよ。いつもより楽しくやれんなと思ってな」

「いつもだと?」

偽ライダーはにやつと笑う（気持ち悪い）と口を開いた。

「いつものわけわかんねーって顔でくたばるゴミよりも、こうやってどんなものにやられるか見えてるゴミの方が表情が数倍おもしろーんじゃねえかと思ってたんだよ。俺は」

「……なるほど。吐き気がすんのは顔だけじゃねーってことだな。このくそバツタが」

俺は偽ライダーもといくそバツタに対して戦闘態勢を取った。

「こいよ。ぶちのめしてやるぜ」

「そ い つ は 楽 し み だ

なアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

くそバツタは叫びながら突進してくる。だがその動きは直線的でしかも遅い。おそらくこいつの本体は喧嘩慣れすらしていないのだろう。

おれは突進を悠々と躲すともっていた買い物袋に手を突っ込んだ。そこから取り出したのは油。ちょうどさっきスーパーで買ってきたお徳用だ。

俺は油をくそバツタにぶっかけた。そして、素早く呼吸をする。

「波紋疾走オーバードライブ!!!」

波紋は油にしっかりと流れた。しかし、

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

くそバツタには効いていないようだった。

俺は一度舌打ちした後、くそバツタの攻撃を避ける。

「なんだあ!?その花火はよお!!痛くもかゆくもねえぜ!!!」

「そうかよ!!じゃこれはどうだ!!!」

俺は買い物袋をくそバツタに向かって放る。買い物袋は中の野菜たちが生命磁気への波紋疾走によりお互いが強くくっついていることから、中のものが外に出たりすることなく、宙に舞ってくそバツタの視界をふさいだ。

「山吹色の波紋疾走!!」

俺は買物袋ごとくそバツタを殴る。メメタアという音と共にくそバツタの方だけに波紋とダメージが行くはずだったが、くそバツタは全く気にした様子もなく俺に腕を伸ばしてきた。

バツタステップでそれを回避しながら、買物袋を回収する。

「(やつぱりどうやっても波紋だけじゃダメージは通らないか)」

スタンドには触れるがダメージは入らない。スタンドはスタンドでしか倒せないということを、今更ながら、俺は実感した。

「きかねーっつてんだろうがッ!!」

「……そうみたいだな。じゃあ作戦を変えさせてもらうぜ」

俺はくそバツタを睨みつける。くそバツタは余裕そうに構え、俺の攻撃を待っているようだった。

しかし、俺はそんなくそバツタを無視して一目散に逃げ出す。

「なッ!!きたねーぞ!!」

「汚くて結構!!あばよ、くそバツタ!!」

俺は高らかに笑いながら走り続ける。バット・カンパニーには普通に追いつかれたが、スピードのなくそバツタが俺の鍛え抜かれた逃げ足に敵うはずもなく、くそバツタとの距離はみるうちに開いていった。後ろで、ずっとくそバツタが何か叫んでいたが、完全無視で俺は近くの林へと入っていく。

「ゴミが、どこいきやがった!!!」

林の奥に潜む俺までもが、耳をふさぎたくなるような大声で、くそバツタは叫んでいる。近所迷惑な奴だ。まあ、スタンド使い以外には聞こえることはないのだが。

10分か15分ほどした後、くそバツタの声は聞こえなくなつた。

「(やつと行きやがったか。あと少し経ったらこの林から出よう。そんで、またひきこもるか……くそ!スタンドさえつかえりやあのくそバツタをぶっ倒せるのに!!)」

もつとも、俺にスタンドはまだ使えないし(たぶんいつか使えるようになるはず)、使えたとしても戦えない場合もある。ないものねだ

りはやめよう。

2分ほどその場にとどまり、辺りに注意を払っていたが、くそバツタらしきものは来なかったので、俺は立ち上がる。いや、立ち上がるうとした。

「うげっ！」

俺は、いつの間にか足に絡まっていたロープに足を取られ、転んでしまう。

「いてて……なんでこんなところにロープが？」

ロープを足から取ろうとした瞬間、ロープは逆に思いつきり俺の足に絡みついた。その力は明らかに普通じゃない。これはおそろく、「くそバツタの能力か!!」

ロープはまるで蛇が獲物を絞め殺すときのように強く俺の足に絡まっている。まるで、ロープが自らの意思を持ち、俺を殺しにきているようだった。

このまま足の骨が折れるのは勘弁してもらいたい。俺は右手の人差し指と中指に、波紋を集中させる。

スタブオーバードライブ  
「波紋指突疾走!!!」

指先に一点集中させた波紋は、まるで達人の手刀のごとくロープを断ち切った。そして、切れたロープを素早く俺は放り投げ、様子を見る。どうやら少なくとも、元の大きさの半分以下にしてしまえば、動かなくなるようで、分断されたうちの、長い一方だけが、再び俺に向かってきた。

そこにすかさず、俺はもう一発波紋指突疾走を入れて、ロープをまた断ち切り、放り投げる。どうやら、もう動かないようだ。

「めんどくさい能力だな、あのくそバツタ」

俺がため息をついたその瞬間、油断した俺の首にさつきよりもずつと太いロープが巻きついた。

「うぐっ!!」

首を絞められ、呼吸ができなくなる。

「(しまった、息が…波紋の呼吸ができない!!)」

ロープをどうにかしようともがくが、とても腕の力だけで切れるよ

うな太さじゃない。体に蓄積されている波紋は、首の骨を折られないようにするのが精いっぱいだ。

「(まだ何もできてないのにこんな所で終わっちゃうのか?)」

俺の頭に、さまざまな記憶がよみがえる。前世の記憶、逆手の男、家族、じいさん、修行の日々。

まだ終われない、終わってなどたまるものか。

死が間近に迫ったその時だった。

『お選びください』

そいつはいつの間にかそこにいた。だが、いつもそこにいたような気もした。

『どれかお選びください、サカエ』

そいつは紛れもなくスタンドで、そして紛れもなく俺だった。しかし、

「(ス、スタンド。おれのスタンド……でも、だめだ。だめだった)」

スタンドが発現し、そしてそれを認識したからこそ、理解できた。目の前に立つ俺のスタンドは、あまりに小さく、そして力もない。また、その黒い体は人型で、鋭い爪があるわけでも、剣を持っているわけでもない。首に絡みつくロープをこのスタンドはどうすることもできないということ。

俺の全身から力が抜け始め、意識が朦朧としてくる。どうやら本当にここまでのようだ。目の前にいたはずの人影もいつの間にかいなくなっている。もうどうすることもできない。

「(ごめんな…みんな)」

死の覚悟を決めた俺の右腕が、突然跳ね上がる。まったく意図しない行動に、朦朧としていた俺の意識が一瞬覚醒する。

そして、どういう訳か首にまきついたロープの力がなくなった。

俺は激しくせき込みながら、酸素を取り込む。まさに、九死に一生を得た気分だ。

咳をしながら辺りを見回すが、スタンドらしきものはいない。

代わりに俺の右手に真っ黒なナイフが一本握られていた。どうやらこのナイフが俺を助けたようだった。そしてこれが、俺の力であることを、俺は何の疑問もなく理解する。

強く念じるとナイフは先ほどの小さなスタンドに変わった。そして再び念じればナイフになった。

俺は手の中のナイフを見つめ、それを強く握りながら、笑みを浮かべる。

さあ、反撃開始だ。

## 愛と憎しみの引力②

「くそッ!!キリがねえ、あのくそバツタが!!」

俺は飛びかかってきた(無生物なのでこの表現が正しいかはわからないが)炊飯器を真つ黒なナイフで一刀両断する。炊飯器は完全に真つ二つにならなかったようで両断されたうちの片方が再び飛びかかってくる。俺は炊飯器をつかみ、同じく飛びかかってきていたポツトに叩きつけ、その二つを同時に無力化した。そんな俺に一息つく間も与えず、今度は別の物が襲いかかってくる。さつきからずっとこんな感じで、無生物に襲われ続けているのだ。もっとも、大して強くないので、めんどくさいなあとぐらいしか感じないが。

だが、ずっと無生物たちを相手にしていて、いくつかわかったことがあった。

まず、俺のスタンドは増えるということ。これは別に、二体目のスタンドが現れるとかではなく、ただ単純に、ナイフの本数が増えるということだ。最高で7本。これだけあっても、正直あまり使い道がないのだが……まあ多いに越したことはないだろう。

そして、襲いかかる無生物たちが、どういう訳か俺のいる位置がわかるということだ。

このことが無生物たちのめんどくささに拍車をかけていた。どこに隠れようとも追っかけてくるし、きつとどこまで行っても追っかけてくるだろう。それに心なしか無生物たちの動きが、だんだんと鋭くなってきたような気がする。

「(このまま、ここでこいつらとやりあっても状況は進まない……やっぱり、くそバツタを直接たたくのがよさそうだ)」

俺は無生物たちの攻撃を軽くないながら走り出す。

スタンドの能力の中には、スタンドが直接手を触れることによつて、ほかの物質に何らかの影響を及ぼすことができるものがある。例を挙げるとすれば、ディオの息子にあたる少年の命を作り出す力や、おかつぱのファイアのジツパーをつける力などだ。おそらく、この無生物たちも、そういうタイプの力によって動いているのだろう。こん

なにさまざまなものに触れるということはきつと、くそバツタはゴミ捨て場とか廃材置き場とかにいるのだろう。

俺はそう推測し、近くにそういったものがなかったかを思い出す。……だめだ。ひきこもってたせいで、結局この町の構造なんてほとんど理解できていない。どうやら、これは走り回って探したほうが早いらしい。くそバツタに向かって馬鹿でかい声で挑発しながら走り回っていれば、向こうから来てくれそうな気もするのだが……さすがに目立ちすぎるのでやめておこう。

後ろから追ってきている無生物たちに警戒しながら、俺は林を抜けた。割と大きな林で抜け出すのに時間がかかったが、この林がなければ、状況はもう少しつらいものだっただろう。とりあえず、俺は心の中で林に感謝しながら、辺りを見回す。少なくとも見える範囲にはくそバツタの姿は無いようだ。

「なにが悲しくて、あんな気持ち悪いものをこつちからさがさにやなんねえんだよッ!!」

悪態をつきながらも、俺は走ることをやめない。

走り続けて、俺は先ほどチラシをもらった通りまで来た。そこではいまだに外国人風の男がチラシを配っている。

不意に男と目があう。

俺は一瞬、走る速度を緩めたが、それはあくまで一瞬のことで、またすぐに加速し、その場を後にする。

「あほか、何考えてんだ俺は……あの男は確かに怪しい。だが、怪しいっていうだけだろうが」

自分の心に浮かんだ考えを押しつぶしながら、俺は走り続ける。

そして、200m程通りから離れたところで、俺は足を止めた。

目線の先には奴がいる。

「見つけたぜ。くそバツタが」

くそバツタは予想していた通り、ゴミ捨て場の前に陣取り、それらをあさっている。まったく、あの姿、言動、行動どれをとっても気持ち悪いなんて、くそバツタの気持ち悪さはもはや感動の域だ。

スタンドが発現したことによって、少し心に余裕ができた俺は真っ

黒なナイフを軽く握りながら、悠々とくそバツタに近づく。あと10mといったところで、あちらも俺に気が付き、気持ち悪い笑みを浮かべた。

そしてお互いが2m程まで近づいたところで俺は足を止める。くそバツタは笑みを浮かべたまま、話しかけてくる。

「みつかんねえからよく。とりあえず、サクツとくたばってもらうために、あのゴミどもはなってみただが…お気に召したかねえ」  
「……………」

「でもよ、ホントはこんな事しなくなかったんだぜ。テメエの表情も何にも見れずに終わっちゃうからなく。必死こいてここまで走ってきてくれたテメエに、俺は今拍手を送りたい気分だよ、本当」

「そうかい。じゃあ今のうちにできるだけ拍手しとくことをお勧めするぜ。しばらくはできなくなるだろうからよ」

俺を挑発していたくそバツタは、逆に俺の挑発一つで面白いくらい怒りをあらわにした。単純な奴だ。

「調子こいてんじゃあねえぞゴミがツ!!!」

くそバツタは先ほどと同じく、ただ単純に突進してくる。後はこれを躲して、ナイフで刺せばそれで終わり。そのはずだった。

「うぐツ!!!」

予想外のスピードで俺の腹にくそバツタの拳が突き刺さる。俺はその予想外のダメージに意識が一瞬飛びかけるも、必死にそれを繋ぎ止めた。

くそバツタは間髪入れずに俺を殴った方とは別の腕を使い、追撃してくる。これまた先ほどとは比べ物にならないスピードだ。

その攻撃に何とか反応し、腕でガードする。しかし、さすがスタンドといったところか、波紋で強化されている腕がみしみしと嫌な音を立てた。

「く…なめんなツ!!!」

俺は握っていたナイフでくそバツタを切りつけようとするも、くそバツタはそれを悠々と躲した。

くそバツタはそのまま後ろに下がると、余裕たっぷりの表情で俺を



見る。

「くく…今のテメエの考えてること当ててやろうか? 『何でこいつこんなにも速いんだ』 だろ?」

くそバツタに思考を読まれ、俺は少し顔をしかめる。

「ヒアアハハハハハハ!!!今、テメエ『訳わかんねー』 ってツラしてるぜーッ!!!」

高笑いを続けるくそバツタに気を取られたその瞬間、左腕に鋭い痛みが走った。

俺はとつさに左腕を押さえ、痛みの原因を引き抜いた。その正体は包丁。同じ場所にとどまり過ぎたせいで、無生物たちに追いつかれてしまったようだ。

「ヒアアハハハハ!!!どこ見てんだよッ!!!」  
「うッ!!!」

包丁に気を取られていた俺はくそバツタの攻撃を避けることができず、拳をもろに食らう。

その反動で後ろに5mほど吹き飛び、追ってきていた無生物たちに激突する。

「波紋ッ!!!」

くそバツタは無生物たちによる追撃を狙ってたのだろうが、俺は逆に波紋で体を強化して、激突した無生物を破壊した。

「残念だったな。お前のペットは全部壊れちゃったみたいだぜ」  
痛む体を起き上がらせながら、俺は言う。

「ああ、本当に残念だ…なあ!!!」

全くそう思っていないであろう台詞を口にしながら、くそバツタは俺に突進を仕掛ける。そのスピードはまたも上がっている。

今度は俺も反応し、攻撃を避けるように体をねじりながら、ナイフで切りつける。だが、くそバツタはそれを避け、反撃してくる。

俺は動体視力が、くそバツタはスピードがお互いのそれを上回っているために、両者攻撃が相手にあたらない時間が少しの間だけ続いた。

その短い時間は俺の動きが一瞬止まることで終わりを告げる。俺

の左腕に鉄パイプが突き刺さったのだ。鉄パイプは波紋で思いつきり強化した腕に突き刺さったせいかな、もはや動くことはなくなっているが、俺に大きな衝撃を与えた。

「(まだ、のこってツ!!)」

そんな風な思考をひねり出すにかかった一瞬の間は今までぎりぎりで保たれていた均衡を崩すには十分だったといえよう。

容赦なく顔面に一撃を入れられ、視界が暗転し、俺は地面に倒れる。

「無様だなあ」

くそバツタがゆっくりと近づいてくる。おそろくはとどめを刺す気なのであろう。対する俺は地面に倒れ動けずにいる。

こんな絶望的であるはずの状態において、なぜか俺の頭はとても冷静に働いていた。

今まで気にも留めていなかった事柄が、まるでパズルのようにつながっていく、俺を一つの推測へとたどり着かせる。

「そうか…無生物…無生物こそがお前のドーピングだったってわけか」

「……………気づきやがったか」

くそバツタは一瞬固まると、驚いたようにそうつぶやいた。

その反応で、俺は自らの推測が正しいことを確信する。

「お前のスピードが増す前には必ず俺が無生物を破壊していた……………しかも破壊すればするほどお前は早くなる」

「いつ気づいた？」

「…厳密に言えば、確信したのはお前の言葉なんだが…………推測できたのはさっきの一撃。ほんの少しだがまた早くなってたからな」

俺は左腕に刺さったままの鉄パイプを見せるように、少し左腕を上げた。

その様子にくそバツタは再び笑い出す。

「ヒアアハハハハハハハハッ!!!!そうか!!謎が解けてよかったな!!!じゃあ、死「一つだけ忠告しといてやるぜ」

腕を振り上げたくそバツタは俺の言葉で停止し、怪訝そうな表情を浮かべた。



「お前のヘイト・オン・ミーじゃ、俺のスタンド：『ボーイズ・タウン・ギヤング』には勝てねえよ。あきらめな」

ボーイズ・タウン・ギヤング。そんな適当に付けた名前は、それを口にした瞬間。すつと俺の頭に馴染んだ。まるで最初からその名前であつたかのようだ。認識することでスタンドはその力を確固たるものにできるらしいが、名前を付けたことで、スタンドに対する認識が強まり、少しだけ、より俺に近いもののような気がするようになった。直感で名前を付けたのは案外正解だったかもしれない。…まあ、そのおかげで強くなったのかはわからないが。

「スタンドは精神の具現化だとあの男は言った：なのに勝てねえだど!!? 俺が：俺が teme emi みたいなゴミよりも精神が弱いわけがあるかッ!!!」

くそバツタは隠し持っていたらしいねじを俺に向かって投げつける。破壊するとかくそバツタが強くなってしまふので出現させたナイフで壊さないように適当に対処する。

「(ナイフを出したら、銃の中の弾が4発から3発に減った?なるほど、ナイフ7本||銃1丁+弾6発ってわけね)」

一人で納得しながら俺は引き金を引く。くそバツタを殺さないようにできるだけ急所は避けて打つが、それが仇となったのか、2発を避けられてしまい、1発は当たる前にキャッチされてしまった。

「ヒアアハハ!! 見ろ!! やはり teme emi の精神ごときじゃ、俺は倒せねえんだよッ!!!」

くそバツタは笑いながら、持っていた弾丸を捨てる。否、捨てようとした。しかし、弾丸はその手を離れずに、指先にくっついたままだ。「スタンドは俺の精神。つまりは俺の分身だ。俺に波紋が流れないわけないよな?」

俺の言葉も、指先に残る弾丸も理解できないくそバツタは、もはや理解不能と、弾丸を見つめたままフリーズしたパソコンのように思考停止したようだった。

「いくぜ、味わいな!!! スタンドから流れる波紋!!! 漆黒色の波紋疾走!!!」  
公園での時とは違い、スタンドから放たれる波紋の為か、くそバツ

夕はびくびくと体を痙攣させた後に倒れ、そして、本体が気絶したのか消滅してしまった。一応、手加減したけど…死んでないよな、本体。俺は祈るように両手を合わせる。

俺は一度ため息をついた後、体についていたほこりを払う。

「…チラシの奴探しに行くか」

少し考えた後、先ほどのチラシの男を探すことにした。ディオのチラシなどここで配られては困るのだ。そのため、俺は軋む体にムチ打って歩き出そうとする。だがしかし、すぐにその必要はなくなつた。

目の前にはすでに目的の男が立っていたのだ。

男の目つきは何か不審者を見るようなもので、その対象は明らかに俺であった。しかも男はちらちらと銃の形をしたボーズ・タウン・ギヤングを見ている。そのことが男がスタンド使いであることを物語っていた。

「これはまずい。まずすぎる!!!完全に危ない奴だと思われてる!!!」

一難去つて、また一難。明らかに俺を警戒している男を見ながら、俺はこの状況にピッタリな言葉を思い浮かべていた。

## 愛と憎しみの引力③

俺は今、体中ボロボロで銃とナイフ（と言ってもスタンドだが）を持ち、あと腕に鉄パイプが刺さってる。

目の前の男はそんな俺をめちゃくちゃ怪しそうに見ている。当たり前だよこんなやつ街で見かけたら即通報だよ。

さてここで問題だ。目の前の男と戦闘を行わずにすむ方法を応えよ。

次の選択肢から一つだけ選べ。

- ①―正直にくそバツタとの戦いのことを話して信じてもらう。
- ②―適当にこの場をやり過ごす。
- ③―何かハプニングが起こって、うやむやになる。
- ④―全力で逃げる。
- ⑤―不可能。こんな怪しい奴は殴られる。

「(④)は今の体調だとスタンドを使つて全力で攻撃されたらお陀仏だ。③が起こってくれたら一番いいんだが：現実的に可能そうなのは①か②だろうな。こいつスタンド使いだし、下手に嘘をつくより、正直に言った方がいいかもしれないな)」

とりあえず①を選んだ俺は男に事情の説明：：という名の言い訳を始めた。

「あー、言つとくが俺は別に銃を乱射している不審者とかじゃない。ただちよつとこの世のものとは思えないビジョンに襲われただけだ」俺は手を上げながらそう言った。スタンド使いであるなら今の説明でもなんとなく言いたいことは察してくれるであろう。

男は俺の言葉の真偽を確かめるように俺の瞳をまっすぐ見つめてくる。それに負けじと俺も男の目を見る。

数秒間、そんな状態が続いた後、男は俺から視線を外した。

「：：とりあえずはお前の言葉を信じてやるよ」

「ずいぶんとあっさり信じるな」

「なんだ？嘘なのか？」

俺は「そうじゃねえけど」と手を横に振りながら、思わず出てしまっ

た言葉の否定する。

「なんかな、お前は嘘ついてねえ。そう思えるような目をしてんだよ」  
ずいぶんとロマンチストだなと思ったが、言う状況が悪くなりそうなので、何も言わずにいることにしよう。

「それに」男は一度言葉を切ると、俺の方。正確には俺の後ろに視線をやった。「信用するに足る証拠も見つけたしな」

そう言った男はいきなり叫び声を発すると、突如として現れた三本目の腕で、いつの間にか持っていた石をぶん投げた。

後ろでアスファルトが砕ける音がして、俺は振り返る。そこには飛び散ったアスファルトによって行動不能になっている包丁が無残に転がっていた。後ろでは男が「外したか」とか言ってる。俺はさらに視線を地面からあげていく、そして

「気絶もしてなかったのか…くそバツタが」

くそバツタは先ほどの傷が痛むのか若干ふらふらとした足取りでこちらに近づいてくる。その様子に、俺は全身の筋肉を強張らせた。明らかに先ほどよりも強い。大方、俺への怒りで一時的にスタンドが成長しているのだろう。確か物語の中でもそういったことが起こっていたはずだ。

「にげられねえぜええ!!恨みや憎しみつてのには引力があるんだよおツ!!どこまでも追いかけて俺はテメエをぶつ殺してやるぜツ!!」  
奇声を上げ、くそバツタは俺に襲いかかってきた。かなり早いけれどぐらいならば対処はできる。俺はくそバツタに銃口を向ける。しかし、

「(あ、やば。弾切れしてたんだった)」

銃とナイフを握ったまま、再装填の仕方わからない俺は、攻撃することをおきらめ防御の姿勢を取り、衝撃に備えた。

だが俺の体に衝撃が走ることはなく、代わりに苦痛の叫び声と、吹っ飛ぶくそバツタの姿が目飛び込んできた。

「確かに、あれはこの世のものとは思えない」

俺のすぐそばに立つ男は真剣な表情をしながら、そうつぶやいた。隣には男のスタンドらしいものが佇んでいる。

「(こいつのスタンド：速いな。しかも力も強いな。くそバツタをそんなに軽々吹き飛ばすなんて)」

敵に回したくない。そう思いながら俺は男のスタンドを観察する。黄色い体に人間に近いフォルム、そして兜をかぶったような頭はまるで古代の戦士のようだ。剣とかは持ってないけど。

「なんであれを殺そうとしなかった？」

「は？」

男の突然の問いに思わず聞き返してしまう。男はそれが気に入らなかつたのか、少しイラついた表情を見せた。

「銃を向けたときに足を狙っていただろう。普通殺されそうになつたら、殺してでも身を守ると思うんだが。なんでだ？」

「なぜって…：いわれてもなあ」

正直言われるまで気にしていなかつた。俺はなんでもくそバツタを殺さないようにしていたんだろう。あいつを生かしておくメリットなんてたぶん何にもないのに。少し考えるも一向に結論は出ず、俺は男に肩をすくめて見せた。

その様子に男は気に入らなそうに鼻を鳴らした後に、くそバツタの方に向き直つた。

くそバツタはというと、どうやらまだこちらを攻撃するつもりらしく、ふらふらと立ち上がり、こちらに向かってきている。

そんなくそバツタを男のスタンドは頭を鷲掴みにして拘束した。相当な力でつかんでいるらしく、ギリギリと音が鳴っている。くそバツタの悲痛な叫びが響き渡る。

「お前はさつき、憎しみには引力があるといったな。俺と近い考えだ。だが真逆の考え。だからお前に見せてやるよ。俺の引力。愛の引力を」

男は深く息を吸って、一度吐く。そして静かに己のスタンドの名を呼んだ。

『ラブ・ミー・ドウ』

何も起こらない。俺がそう思った次の瞬間、道の向こうから人影が一つ迫ってきた。人影は引つ張れるようにこちらに転がってくる。



痛みと困惑で叫びを上げるその人影は必死に自分の体を静止させようともがくが、大した効果もなくどんどんこちらに近づいてきている。

「(なるほど、『引力』か)」

俺は異様なこの光景を見て、男の能力を理解した。スタンドが触れたものを自分に向かって引き寄せる能力。詳細はさすがに分からないうが大まかに言えばこんなところだろう。

そしてついに、人影は俺たちの前まで転がってきた。

男が転がってきたおっさんを見つめる。

「お前がこいつの本体か」

「くそッ!!なんだってンだよテメエはよお!!」

俺は転がってきたボロボロのおっさんを見る。声も似てるし、くそバツタに弾丸を撃ち込んだ場所と同じところに傷がある。こいつが本体で間違いなさそうだ。

「(しかし、どつかで見たことあるんだよなこのおっさん)」

俺は記憶を掘り返し、どこでこのおっさんを見たのかを探る。数秒考えてその答えは出た。

このおっさん、俺がチラシをもらったとこの通りにいた、俺のこと睨んだおっさんじゃねえか。まさか、ちよつと叫んだだけで殺されかけるなんて。

杜王町コエーと俺は改めて思った。

「おい」

突然男に声をかけられ、俺の思考は現実に戻ってくる。物思いにふけている間におっさんは気絶していた。体にはいくつものあざができている。犯人はおそらく目の前のこの男だろう。怖いなこいつ。「多分もうあいつが襲ってくることはないだろうよ。ちと説得したかならな」

「…そうかい。関係ないのに助けてくれてありがとな」

「いいや、気にしなくていい。だがちよつと付き合ってもらおうぜ」

男は少し警戒しているような目で俺のことを見つめながらそう言った。

ここで誘いを断れば、何をされるかわかったもんじやない。俺は静かにうなずいて、男と一緒に歩き出した。

\*

俺は男と共にピザ屋に入り、机を挟んで向き合っている。

一応手当をして、波紋で痛みを和らげているものの、さすがに体がだるいので、とりあえず栄養を補給しようところに入ったのだ。

「とりあえず、お互いに自己紹介でもしようじゃないか」

男はチラシ配りをしていた時のさわやかで礼儀正しい態度とは打って変わり、どちらかというところ荒々しい感じでそう言った。

その言葉に俺は運ばれてきたピザを口に入れながら、うなずく。

「俺の名前はポストロ・ブラボー。アメリカ人で先月ここに越してきた」

「俺は吉崎 栄。日本人だが先月イタリアからここに来た。…で、なんでお前は俺を助けたんだ？」

俺は会話の主導権を得るために、男、ポストロが俺に何か質問するよりも前に質問した。

「困ってるやつは助けようと思うのがふつうだろ？それが人の愛つてもんだ。まあ、俺の場合それだけじゃないけどな」

ポストロは一枚の紙を取り出す。

「お前はこの男…ディオを知ってるな」

「…いいや、知らないな」

「嘘が下手だな、栄。目が一瞬泳いだぜ」

ポストロは殺気を出しながら俺を睨みつける。どうやら下手な嘘は逆効果のようだ。てゆうか、また目かよ。こいつは眼球フェチなのか？

「確かに俺はそいつのことを知っている。だが、風のうわさ程度だ。実際、俺はそいつの名前さえも知らなかったしな」

「…嘘は言っていないみたいだな」

確かに嘘じゃない。俺はディオの名前なんてポストロが配ってい

たチラシを見なければ、知ることになるのはもっと先のことだっただろう。

「じゃあ栄。ディオは今どこにいるか知っているか？」

「…確か、死んだと聞いているが」

「……そうか」

ボストロは一瞬悲しんだような表情をするが、すぐに先ほどまでの表情に戻る。

「予想は…していたが…やはり死んでいたか」

ボストロは「もうチラシを配る必要はないか」つぶやきながら視線を落とした。先ほどまでの殺気はもう感じられない。

どうやら俺の不安要素が一つ消えたようだ。そこで俺は敵意を感じられなくなったボストロに、質問を投げかける。

「なんでお前はディオを探しにここに来たんだ？聞いた話だどこいつはエジプト辺りにいたらしいが」

「…なんとなくだ。直感だがなぜかここにいるような気がした」

「なんとなくでかよ」

「そうだな…あえて言うならば、親子の絆を信じたのさ」

は？今、信じられない言葉を聞いたような。

「ま、待ってくれ、ボストロ・ブラボー。お前とディオはどういう関係なんだ」

「一言でいうならば、親子だな」

これは、完全に予定外の事態だ。明らかに、物語とは違う形で時が流れて行っている。おそらくは俺という存在が起こしたバタフライエフェクトというやつなんだろう。まさに蝶の羽ばたきが嵐を起こした並の作用だ。

だが親子か、ならばボストロがここに来た理由も何となくわかる。おそらくは物語の主人公たちの持つ、一族の運命が彼をここに呼び寄せたのだろう。

「（ん？てゆうか、なんか違和感が…）」

俺は、180cm位で俺と同じか少し上くらいの年齢といった感じの青年、ボストロを見つめる。

「お前…今いくつ？」

「13歳だが。それがどうした？」

「いや…別に」

この夜、日記として使っている手帳に、外国人の遺伝子はすごいという一文が添えられることとなった。